

風土



石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

水 跨 ぐ 醉 眼 の い ま 見 せ た き 梅

(句集『含羞』より昭和二十六年作)

この句には「秋元不死男、一夜鶴川村に泊まる」の前書があります。秋元不死男は戦前西東三鬼らと新興俳句運動に深く関わり、その後新興俳句弾圧事件に連座し、二年間の獄中生活を余儀なくされました。戦後は現代俳句協会を発足させ、山口誓子の『天狼』に同人参加し、昭和二十四年には俳句誌『水海』を創刊主宰しています。この頃の桂郎師の西東三鬼らとの幅広い交流を考えれば不死男との付き合いも当然考えられます。この句の「醉眼」は不死男と酒場「ボルガ」で意気投合し、鶴川村に酔い戻ったと読めます。どうしても見せたい梅の花があったのです。

藤 房 を 妻 の 手 に 載 す 平 ら か に

(句集『含羞』より昭和二十六年作)

桂郎師の妻俳句の一つです。これまでも「子に領つ苺のひとつ妻の唇に」、「あまり寒く笑へ妻も笑ふなり」など、採り上げてきましたが、特徴はこまやかな所作で、愛しみを表現しているところにあります。ここでは「平らかに」がそれに当たります。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

月 光 に た ま し ひ 削 る 思 ひ か な

(句集『月の道』より平成十七年作)

この句には「悼 酒井章鬼」の前書があります。酒井章鬼は浜明史と共に、器師の盟友でした。奈良在住であった章鬼のもとを何度も訪れています。章鬼と共に奈良の文化が魅了してやまなかったのです。器師はその悲しみを「たましひ削る思ひ」と吐露しています。同じ並びに「章鬼亡し同じ湯にゐて後の月」の句があり、その悲しみを月光に象徴させているのが解ります。「同じ湯にゐて」は、かつて夜を徹して語り合ったことを想い起しているのかもしれない。器師にとって月は魂の棲む星、死者の世界なのです。

水 底 の 冬 日 だ ま り は 蛭 銀 座

(句集『月の道』より平成十七年作)

これは写生の句ですが、器師の季語に対する考えが垣間見られて面白いです。一見「冬日」(冬)と「蛭」(春)は季重なりに見えますが、現実にある姿なのです。冬日のほのとした暖かさに、蛭がすでに動き始めているのです。季語は「冬日」です。

よもぎ餅

南
う
み
を

みづうみの芯の明るき涅槃雪
すぐそこにひづめ跡ある花かたご
きさらぎの鋸目するどく立ちにけり
かなな屑ふはりと春の焚火かな
腕組んで剪定の庭ざつと見る

ひと塩に京菜のはだへ揉みにけり
荒草を踏めば押しくる彼岸かな
姉の忌を笑うて修すよもぎ餅
雀らを隠してなづな花盛り
ひばり揚がる兄の享年ひとつ越え
夜あがりの雫のひかる桜かな
わが椅子の傾きやすき春のくれ



竹間集

同人作品



春 闌 く

中 根 美 保

篠^{ささ}がちになりたる山も笑ふなり
花冷やひときは昏き蚕棚
春の月朧を離れつつありぬ
花吹雪纏ひて棕櫚の一樹あり
大いなる楠を仰ぎぬ春日傘
木洩れ日の土を離れず春の蠅
春闌くや血汐透けたる白き鯉

紅 き 椿

小 林 共 代

補陀落へ紅き椿の流れゆく
休耕田水を平らに燕くる
花映し人を写して神の池
草の芽や朱柱秘めし国分寺
ひと巡りして花に逢ひ雨にあふ
橋詰め桜に触れて戻りけり
春日傘ほしき齡となりけり

四 月 馬 鹿

間 島 あ き ら

四月馬鹿定点観測十年目
宇宙より届く地球画冴返る
へり飛んでクルーの仰ぐ花の雲
船頭の笠に花降る葵舟
塗り皿のうぐひす餅に声を待つ
鳥雲に古墳かたどる石の数
芝芽立つ歩数六歩の二号墳

水 温 む

内 藤 静

花あしび厩戸皇子駈けて行く
並び出て土偶と紫苑らしき芽と
百合の芽のひと日の丈の確かなる
まづ月の満ち欠けを言ふ西行忌
船底に運ぶ大岩涅槃西風
木瓜咲いて観音様に目が三つ
嘴の睦む諍ふ水温む

ラ ム ネ 菓 子

森 高 武

ラムネ菓子含めば消ゆる雨水かな
三月の海の重さよ黙禱す
三・一一海辺に人の増えて来し
躓きて磯巾着を驚かす
春の浜小石貝がら見ては放り
満開の辛夷の岬一周す
鼻先の触れて大島桜の香

牡 丹 雪

土 井 ゆ う 子

こまごまの思ひつながる雛飾る
牡丹雪のせて生命線ふかく
身長をぼんと計られ啓蟄なり
笹鳴や北より天気下り坂
春の雪さし出されたる男傘
救命センター耿耿として冴返る
うららかやタクシードアを開けて待つ

鶺 鴒 の 瀬

浜 福 恵

沼の茂みの朝動きだす残り鴨
菜の花やファームに山羊の親子かな
久に来て春せつせつと遠敷川
花満ちて良辨和尚生誕地
夫が蝶になりて来てゐる鶺鴒の瀬かな
師の影を鶺鴒の春の渦に追ふ
原生林へ風の通ひ路白椿

水 温 む

門 伝 史 会

水温む貝の化石のネックレス
世の自肅知る由もなく地虫出づ
籠り居て旅を恋ひをり西行忌
桜餅少し熱めの加賀棒茶
霾天や電工の声宙をとぶ
種蒔いて日に鮮しき土の息
桜咲く和紙明りして麻生川

春 の 夢

鈴 木 石 花

籠り居に茶会遠のく炉を塞ぐ
穴道湖の蜆汁てふ朝の膳
外出無き空悠悠々と鳥帰る
二人して部屋夫々に春の夢
前向きに生くる証の穀雨かな
手を通す事無き着物春愁ひ
馬酔木咲く予防接種を待ちてをり

花

山 田 暢 子

幸せなひととき花に囲まれて
飛行機雲さくらに空を置いてゆく
花の下老いゆくことを忘れけり
夫も来よ満開の花散り始む
花仰ぐ心が紅く燃ゆるまで
降りしきる落花たましひ遊ばする
花筏老いて得たるはこの自由

春 蘭

岩 木 茂

春蘭やこの山は師と来たる山
墓もたぬ姉の忌日やなごり雪
鳥曇汐汲浜の波もつれ
母の忌の喪服にのこる花疲れ
燕来る淡海は空を開け放ち
土筆野の礎石十六まで数ふ
三鬼忌の手より大きなメロンパン

蝶 の 昼

小 林 輝 子

誹諧を五十年とや亀鳴くよ
ふりかへること何もなし花に佇つ
花びらを拾ひ人の名思ひ出す
摘むまじや青郵邸の露のたう
主なき書屋とときの摘み頃に
裏木戸のかたと閉づる蝶の昼
足下に田堰こぼこぼ春の音

花 筏

田 中 佐 知 子

丹後資料館
宮津市白旗神社
春愁やガラス釧の気泡かな
あたたかや神と相撲を取る土俵
花びらの流る虚空や観世音
閑伽水を掬ふ柄杓に花の塵
潮入川はたと止まりし花筏
耕人の視界に縄文遺跡の碑
霾や砲台山も艦艇も

西 行 忌

中 付 洋 子

西行忌 四句
田の中の朽木柳や西行忌
薄氷を踏みて行くなり西行忌
あかね色に山昏れてゆく西行忌
水飲んで言葉飲み込む西行忌
椿咲く開山堂の「のりこぼし」
修二会果つ「東大寺椿」一枝賜ふ
修二会果つ韃鞞帽を子に被せ

花馬酔木

橋 添 や よ ひ

啓蟄や土動き出すひとところ
源平梅白に先手を取られたる
箱階新島 三句段軋みをしまひ花曇り
行く雁や透きし机のインク壺
叩かれし野火の猛りを見逃さず
欄干に火ぐるま転げ修二会果つ
抜け道の多き奈良町花馬酔木

犀星忌

浅田光代

魚の背のぬらりとひかる犀星忌
派出所の今日の死者数蓬生ふ
補助輪のとれてどこまで陽炎へり
自転車の寝かされてゐる蓬原
お彼岸の磧の石に日の射せる
隔つとも二羽なればよし残る鴨
引鴨の渚に藻屑寄せゐたり

十粒

柿沼盟子

雪柳きのふと違ふ風の向き
桃咲いていささか垣の低くなり
カナダより届く花種十粒ほど
花早きバス停へ行きバスを待ち
枝垂れ咲く花に離れて比翼塚
午後に入りはや風に乗る花のあり
すべりよき太きペン先水温む

初桜

高村令子

何もかもひらがなづくし入学す
葱坊主一年生の生欠伸
初桜まだ人声に触れぬ白
花吹雪土農工商みな浮かれ
ふらここ児かカールブッセの空へ飛ぶ
のどけしや揺られて眠くなる赤子
菜の花に埋もれて村の診療所

かげろふ

土井三乙

街に人疎らなる日々木の芽風
仏壇の奥まで明し春の燭
煎餅の耳食ふことも春灯下
亀鳴くや死の字の読みは一つのみ
青き踏む縄文遺跡に風のコゑ
野の隅に凸と切株あたたかし
岬ごと電車かぎろひつつ北へ

花の雨

林いずみ

手際良きブードルカット鳥雲に
春の虹右手のみあはき二重なす
薔薇の芽やマーマレードの出来上る
マンションか介護施設か木瓜咲いて
根付きたる去年のとなり挿木せり
風折れのさくら一房卓上に
花の雨ついてぼるがのカウンター



山河集

同人作品



南うみを選

初燕シャトルは雲に乗りたがる
梅の香や発声練習「あいうえお」
足湯桶に注ぐ薬湯燕来る
種袋くるくる選ぶレジの横
下瞼閉ぢるまばたき春の鴨

中嶋 陽子

絵ガラスを飛びこえてくる卒業歌
剪定や浮足立ちて寿老人
子に名まへ呼ばれて目覚む入彼岸
ふるへふるさくら人待つさくらかな
蜥蜴出て牛頭天王の足のうら

雨宮 桂子

胸の隆起高々と春受け止めぬ
春の旅日光月光浴びながら
春の岬放ちし夢も揺れるのみ

磯崎 啓三

風土独語／南 うみを



初燕シャトルは雲に乗りたがる
中嶋 陽子

この句は「初燕」と「シャトル」の取り合わせになっています。
「雲に乗りたがる」から、この「シャトル」はバトミントンの羽
根の付いた玉と解します。今年初めての燕の飛翔と打ち交わされ
る「シャトル」のスピードが重なり、「シャトル」がそのまま大
空へ飛翔するのではないかと感情移入したのです。

子の声のときに鋭利や木々芽吹く
六車 佳奈

子育ての中で子供の変化を「子の声」で捉えました。それが「と
きに鋭利や」です。単なる甲高い声ではなく、どきりとするよう
な言葉投げかけたのです。木々が芽吹いて葉を繁らせるように、
子供は着実に成長するのを目の当たりにしています。

ふるへふるさくら人待つさくらかな
雨宮 桂子

「さくら」は、日本人が最も心を寄せる花です。作者もまた「さ
くら」に心を深く寄せて「ふるへふるさくら」と擬人化して
います。どちらも「さくら」の本質を捉えていると共に、「さくら」
は作者そのものとなっています。

石垣のぬめぬめ光る春の城
春の城どこからも見ゆ父母のごと

五百里の旅路の果ての黄砂拭く
強面の師の破顔なる卒業式
水温む洗顔ホイップ角となり
啓蟄や市松模様に椅子並ぶ
三陸に逝きし友の忌桃の花

初蛙いつまでも声重ならず
蓬摘む背中合はせに父と母
右手より初蝶現るや左にも
花片の張りつくままにむすび食ぶ
静脈の透ける腕よさくら冷え

塚原紀代子

谷田明日香

水温むほとけどぢやうの泡一つ
根岸 善行

「ほとけどぢやう」は、湧水のある小川などに生息する小型の
泥鰌で、口ひげの様子からそう呼ばれています。絶滅危惧種にも
なっており、貴重な泥鰌です。水が温んで欠伸を一つ。眠りから
覚めた「ほとけどぢやう」も春本番を迎えます。

石垣のぬめぬめ光る春の城
磯崎 啓三

作者独自の「春」の捉え方が、城の「石垣」を「ぬめぬめ」光
らせました。これは春の雨に濡れた「石垣」とも読めますが、城
を一つの生命体として、春の胎動感を示したと言えます。

青空へ満面の笑み白木蓮
津川かほる

この句は「青空」と「白木蓮」のコントラストが鮮やかです。
そして、「斉に開いた白木蓮を「満面の笑み」と喩えました。「白
木蓮」が、好天の空へ「ありがとう」とほほ笑んでいるように、
感情移入して表現しました。

五百里の旅路の果ての黄砂拭く
塚原紀代子

「黄砂」は中国北部の黄土が風に巻き上げられ、偏西風により、
日本にやって来る微細な砂粒です。視界が遮られ、あらゆるもの
に降り注ぎます。作者は、それを生き物のように「旅路」と置き
ました。黄砂を拭いつつ、地球の広大な営みを想っています。

風土集



南うみを選

淀川の下流が好きで春夕焼 高槻 六車 佳奈

駅前の信号は青春動く

感染は生きる術なり涅槃西風

子の声のときに鋭利や木々芽吹く

蓬摘むときをり吾子を見失ひ

細道の奥のささやき白椿 上尾 根岸 善行

水温むほとけどぢやうの泡一つ

荃立のまだ食べられるまだ食べられる

湖の汀優りや鳥雲に

鳥帰りし湖に月上がりけり

青空へ満面の笑み白木蓮 川崎 津川かほる

春風や珈琲香る神保町

芽柳の光のかげとなりにけり

紫雲英咲く休耕田のしづけさに

おどけ出づ破れ傘の芽毛むくじやら

三・一一午後の一刻かぎろへる 焼津 赤堀美恵子

春キャベツ明るき声の溢れさう

幸せはここにもあるよ露の臺

春昼や老舗に今も大振子

初花に文の書き出しポンと出づ

栄転てふ別れのありて目借時 宇治 渡辺 やや

花ぐもり昼を灯して京町屋

鯉の背に割れて又寄る花筏

大渦の際まで攻めて観潮船

廻る十石舟や飛花落花

まつさらなことばのやうな春の雲 五條 上辻 蒼人

卒業すさしたる事はなきままに

あちこちに足跡のある露のたう

今日のこと大方終へて草の餅

たんぽぽや吾に予定の墓静か